

知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

沖縄から見たマレーシア

坪井祐司 (名桜大学国際学群上級准教授)

筆者の勤務先がある沖縄には、亜熱帯の気候や「やんばる」の森などの自然環境から、人間が紡ぎ出す文化(タイ米で造られる泡盛やバナナの祖先種を利用した芭蕉布など)まで、さまざまな面に「東南アジアらしさ」を見つけることができる。

沖縄の文化は、「チャンプルー文化」と形容されることがある。古くは中国など東アジアと、現代にはアメリカと混交した沖縄の文化的多様性を指す語である。チャンプルーは沖縄料理の代表格であるが、マレー語の「Campur(混ぜる)」と同じルーツを持つと思われる。海を通じてさまざまな地域の人や文化が融合した社会は、マレーシアに通じるものがある。

筆者の専門である歴史学からみても、前近代における日本とマレーシアの関係について史実として確認できる事例は少ないが、沖縄とマレーシアに関しては密接なつながりがあった。東南アジア各地に船団を派遣し、交易で名をはせた琉球王国の存在である。

東南アジア史には、港市国家という概念がある。王が交易の場である港に位置し、商業を統制することで権力を振るう国家である。東南アジア島しょ部の国家は、内陸よりも海に向かって開かれていた。琉球もまた、この港市国家の定義に当てはまる存在であった。

現在のマレーシア半島部における代表的な港市国家がムラカ(マラッカ)王国である。琉球とムラカは、15世紀のほぼ同時期に最盛期を迎え、東アジアと東南アジアを結ぶ海上交易の拠点として繁栄した。交易に重要な役割を果たしたのは華人であり、那覇の旧市街には、ムラカと同様にチャイナタウンがあった。

両者は外交関係を持っており、琉球王国の記録「歴代宝案」には、琉球とムラカの間でやりとりされた書状が残されている。そこから、琉球が中国の陶磁器や日本の刀剣を持ち込み、ムラカからインドの織物を輸入していたことが分かる。琉球の王都である首里の遺構からは、マレー式の短剣(クリス)も出土している。

琉球とムラカの関係は、説話の中にも埋め込まれている。マレーシアには、「ハン・トゥア物語」という英雄伝説がある。ハン・トゥアはムラカ王国に仕えた武人であり、ムラカの王統記「スジャラ・ムラユ」にもその名が登場する。彼の墓はムラカの郊外に残っている。ハン・トゥアは武勇だけではなく王への忠義を体現した人物として、後世の文学や映像作品でもたびたび描かれ、現在でも人気がある。

ハン・トゥアはムラカ宮廷でラクサマナという称号を得たとされており、それが史実ならば、彼は琉球との外交に關与した可能性がある。また、ハン・トゥアの冒険譚において、彼の幼なじみの武人が登場するが、その1人にハン・レキウという名の人物がいる。このレキウは、琉球に由来するとも言われる。

「スジャラ・ムラユ」は、史実と伝説が混合した歴史叙事詩であり、「ハン・トゥア物語」とともに成立したのはムラカ王国の滅亡後のことであるから、ハン・トゥアやハン・レキウが実在したという確たる根拠はない。

しかし、ハン・トゥアを巡る物語は、ムラカと東アジアの中国や琉球との深い関係を示している。「スジャラ・ムラユ」には、中国からハン・リーポーという王女がマラッカに嫁いできたという説話がある。これらの人物に共通する「ハン(Hang)」という名前は、中国系である可能性を連想させる。ムラカと琉球を含む東アジアとの関係性と、それをつないだ華人ネットワークの存在を示唆しているのである。

琉球もムラカも昔日の繁栄は失われたが、海をまたぐ人のつながりを通じた重層的な文化は現在にまで受け継がれている。沖縄では、世界中に広がるウチナンチュ(沖縄人)のネットワークが健在である。

マレーシアでは、多くの移民を受け入れて多民族社会が築かれた。現在の多様性を持った文化や社会のあり方は、歴史を通じた交流の所産である。沖縄における「東南アジアらしさ」に触れると、日本とマレーシアが海を通じてつながっていることを実感できる。

< 筆者紹介 >

1974年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科修了、博士(文学)。現在は名桜大学国際学群上級准教授。専門はマレーシア近現代史。多民族社会マレーシアにおける民族の形成過程に関心を持ち、主にイギリス植民地時代におけるマレー民族の形成過程について研究を行っている。主著に『ラッフルズ：海の東南アジアの「近代」』(2019年、山川出版社)。